○緒言

左に説話する一條の長物語は此浪華津に程近き泉州岸和田の城主岡部家の一大騒動にして事を德川幕府の末造安政の年間に起し局を王政維新の昭代明治の初年彈正臺の審判に結び餘波猶延て今日に及ぶ其間群小奸惡を内に椏にして忠臣之を外に憂ひ區々の心を竭し蹇々の節を致して千酸萬苦辭する所なく終に能く奸佞の毒餌と未然に制し姦臣亡びて忠臣桑へ忠邪曲直の迹長く世に明かに目出度其大團圓を見るに至るまでの事怒るべきあり悲むべきあり泣くべく笑ふべく千狀萬態益出て益奇なるゝ彼の人口に膾炙する伊達前田鍋嶋仙石黑田諸家の騷動に勝るとも劣らざるべき稀世の活劇にして然も事實は一々之を彈正臺の審判書に徵したるものなれば多く其事實を誤らざると信ずるなり看官幸ひに文の粗にして笑の至らざるを恕して偏へに愛顧の勞を垂れ賜はんことを冀ふにゐん編者自識す

特67
391

椿說忠岸浪初編

○第一回

校正　宇田川文海

今を距る事二十年の昔安政元年の頃かとよ和泉國岸和田の城主岡部美濃守某主當時在江戸なりしが同年の三月上浣桃の夭々たる時を撰て下野國壬生の城主鳥居丹波守某主の長女お熊殿を娶て目出度く合巹の禮を行ひ給ふ其後三月を經て御田の植女の早苗とる五月のこゝろより お熊の方にゝ平ならぬ身に成り給ひ野邊の蕨の手を延る翌る二年の二月下浣目出度く產の紐を解き給ひぬ熊熊の夢の祥誤らず產れし其子ゝ玉と延たる如き若君あて然も啼聲眼光尋常の童に異なれば美濃守ぬしゝ更なり お熊の方にも行末賴母しき者に思ゝれ寵愛ひとかたならぬ小籠漏る風にも當じとまで心の限り愛護て彼宋人の苗を振く比喩ならねど手をもて引も延さまゝ欲う思ひをられしが生者必滅の理ゝ貴人も免れがたく美濃守ぬしにゝ同年の秋の初め桐の一葉の落りむる頃より不圖風の心地と枕につき給しが規裘の効驗ゐく日に添て重症に陷り給ふにぞ奥方始め家中一統の心配いゝん方なく御殿醫と唱ふる幕府